慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Herrlee G. Creel; What is Taoism? and other studies in Chinese cultural history
Sub Title	
Author	高山, 方尚(Takayama, Masahisa)
Publisher	三田史学会
Publication year	1973
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.45, No.2 (1973. 1) ,p.123(239)- 124(240)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19730100-0123

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Herrlee G. Creel;

What is Taoism? and Other Studies in Chinese Cultural History.

(The Univ. of Chicago Press, 1970)

此の書は八篇の論文から成る。新たに書き下ろしたものは一つもなく、著者自ら云う如く、過去十六年にわたる研究成果の集成である。

即ち、一九五四年、京大人文科学研究所二十五周年紀念号に寄せた「初期タオイズムの二つの立場について。」を筆頭にして、最近の論文、一九六八年、Chow Tse-Tsung 氏編輯、ウィスコンシン大出版部刊の Wen Lin（文林？）に寄せた「大塊」に至る迄のもので、吾々にとって既知のものもある一方で、容易に閲読し難かったものも収められている。

後掲の目次に明らかであるが、「県の起源」と副題された「中国における官僚制度のはじまり」はただに古代中国史研究者必読の論文というにとゞまらず、中国史を学ぶ者の基本的文献として、既知に属するものであり、同様に広い視野に立って、中国文化を評論したものに、翌年一九六五年発表の「中国史に於ける馬の役割」（アメリカ歴史評論LXX）が収められている。

古代から明代に至る馬の問題、馬種、馬車、騎馬等の諸点を中心に、遊牧民族との関係など多方面にわたる考察が展開されているもので、順次に此の書の末部に配されている。

これ以外の六篇は「タオイズム」と所謂法家に関するいわば思想史的論攷であるが、法家に関する二篇は、「官僚制度」という政治史との関係が明確に意識されていることが伺われる。

即ち、一九五九年の「刑名の意味」(Studia Serica Bernhard Karlgren Didicata.) と六一年の「法家は法学者か政治家か」(Academia Sinica 特冊第四号) であり、従来あまり評価もされず、研究もされなかった「申不害」とその教説に強い照明をあてゝいるのみならず、その役割を法学者的法家の商鞅学派以上に評価する著者の見解が、「韓非子」の記述を手がゝりに、専らその遺説の分析を中心として展開されているのが後者の論文である。

同様に「申不害」に関連しつゝ、彼の教説が「刑名」と称される点に注意し、又その意味の不明瞭さを指摘するとゝもに、その用例を慎重に検討し乍ら、「申不害」の教説を説明するものとしての限定された意味を荷って使われたのは、前漢B.C.一世紀中葉以降から末迄の間のこと、なかんずくそれが「試験制度」と関連していることを明らかにしたのが前者の論文である。

著者は先に、一九五一年のシカゴ大学公開講座の草案をもとにした、一般江湖向けの中国思想史を著わした。「中国思想—孔子から毛沢東まで—」（一九五四年、ロンドン）で、その第八章に、「法家の全体主義」として、所謂法家を論じているが、そこに於

いては、「勢」の慎到派が、「法」の商鞅、「術」の申不害とゝもに法家を形成する一派として論じられているが、こゝでは脚注で一度簡単にふれるのみである。

「勢」と慎到と法家の形成の問題は他の二派への著者の評価を端的に物語るものであるが、又後に述べるように、著者の関心の所在を読者に強く印象づけるものと思われる。

そのことは、又「タオイズム」の本質を究明した関係諸論攷にも明白であるように思われる。

年次的に最も早く発表された「初期タオイズム……」から、一九五六年の「タオイズムとは何か」(J. A. Q. S. 七六号)、「無為の起源について」(Symposium in Honor of Dr. Li Chi on his Seventieth Birthday.) 第一部) の二論文を歴て、「大塊」へと展開するものである。

この間の所説の発展は充分注意されねばならぬところであろうが、その共通する面は、錯雑する思想家の個々の伝記と書物との関係から離れて、端的に思想そのものの特徴を第一の手がかりとして、それぞれの思惟形態を類型的に分類するところにある。

従来の老子と荘子の年代と書物の成立にしばられることなく、そこに著者は三つの立場を指摘した。即ち冥想的なる派と、その推移としての目的的なる派、そして仙派というものであり、結果的に老→荘という関係が逆転されているのである。

余論乍ら、略同様の見解が、前掲「中国思想」に既にみえていることを附記しておく。

特に「大塊」は、冥想派の中心に位置する荘子の所説を、プラトンの所説との比較分析を通じて、その特質を論評する甚だユニークな研究である。

研究史的に概括すれば、此のタオイズムに関するものは、故H・マスペロ氏の所説の批判的継承ということが出来よう。

しかし乍ら、これらの思想史的研究を通読して、その精細な分析を方向づけているものが、所収の他の論考とゝもに、著者が長年月にわたって抱懐してきた「中国の政道の起源と影響」という研究テーマであることを、確認することができる。

ついで乍ら、一九七〇年、この表題の第一冊が、同出版部から公刊された。The Origins of Statecraft in China, vol. 1. The Western Chou Empire がそれである。

参考迄に目次を挙げておく。

1 What is Taoism?
2 The Great Clod.
3 On Two Aspects in Early Taoism.
4 On the Origin of Wu-wei.
5 The Meaning of Hsing-ming.
6 The Fa-chia: "Legalists" or "Administrators"?
7 The Beginings of Bureaucracy in China: The Origin of the Hsien.
8 The Role of the Horse in Chinese History.

毎頁に脚注。索引を附し、本文百八十七頁という体裁である。

（一九七二・九・十・高山方尚）